廬山二勝　并叙其一　開先漱玉亭

開先の漱玉亭（そうぎょくてい）

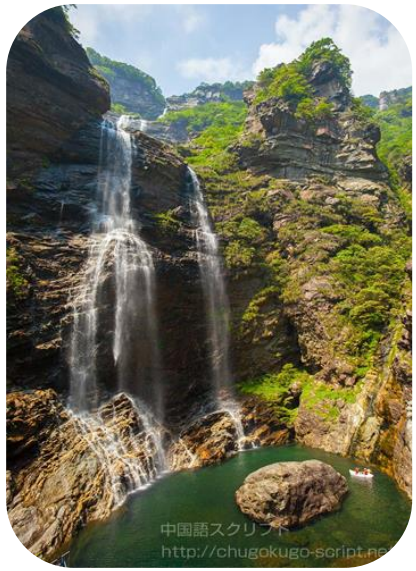
元豊七年四十九歳（一〇八四年）

余游廬山　南北得十五六奇勝　殆不可勝紀　而懶不作詩
其尤佳者作二首

余廬山に游び、南北に十五六の奇勝を得たり殆んど紀するに勝ふべからず而かも懶（らん）にして詩を作らず独り其の尤も佳なるものを択んで二首を作る。

高巌下赤日
深谷來悲風
擘開青玉峽
飛出兩白龍
亂沫散霜雪
古潭搖清空
餘流滑無聲
快瀉雙石谼
我來不忍去
月出飛橋東
蕩蕩白銀闕
沈沈水精宮
願隨琴高生
脚踏赤鯶公
手持白芙蕖
跳下清冷中

高巌（こうがん） 赤日下り
深谷（しんこく） 悲風来る
擘開（はくかい）す 青玉峡
飛出す 両白竜（りょうはくりゅう）
乱沫（らんまつ） 霜雪 散じ
古潭 清空 揺らぐ
余流 滑らかに声無く
快瀉（かいしゃ）す 双石谼（そうせききょう）
我来たりて 去るに忍びず
月は出づ 飛橋の東
蕩々たり 白銀闕（はくぎんけつ）
沈々たり 水精宮（すいしょうきゅう）
願わくは 琴高生（きんこうせい）に 随（したが）って
脚（あし） 赤鯶公（せきこんこう）を 踏まん
手に 白芙蕖（はくふきょ） を持して
跳下（ちょうか）せん 清冷（せいれい）の 中に



【語釈】○**廬山**…江西省北部の九江市の南に聳える名山。北に長江、東に鄱陽湖をひかえる中国屈指の景勝地。北西・南に絶壁をなし、白居易が庵を結んだ香爐峰をはじめ諸峰が聳えている。南麓には開先寺があり、北麓には東林寺、西林寺がある。最高点の標高は１６００ｍ、晋代に慧遠がここで阿弥陀仏信仰をすすめ、陶淵明もこの山に入った。李白の詩で名高い瀑布も三十を数え、南宋には朱熹が白鹿堂書院を建てた。○**開先漱玉亭**…開先禅院は南唐中主が廬山の五老峯下にあった住居を寺としたもの漱玉亭は開先寺の入り口の前の亭。○**奇勝**…すぐれた景勝。○**殆不可勝紀**…勝は堪えるで、不可勝とは手に負えないのをいう。紀すとは遊紀を書くこと。自分の力では遊紀を書きえなかった、それほどにすぐれていた。○**懶**…ものうくして。おこたる。○**尤**…とりわけ。○**赤日**…杜甫の詩に「日色赤きこと血の如し」（喜雨）○**擘開**…擘はひき裂く。○**青玉峽・両白瀧**…査注によれば開先禅院のある山峡を青玉峡とよび、二つの瀑布がかかり、谷間の深い淵（潭）を瀧池というと。○**雙石谼**…谼は大きな谷。○**飛橋**…絶壁や深い谷に高々とかけ渡された橋。○**蕩蕩**…広大なさま。○**白銀闕・水精宮**…ともに月世界の宮殿。水精は水晶。○**沈沈**…静まりかえったさま。時間、とくに夜の時間が静かに経過するのにいう。○**琴高生**…列仙伝にみえる仙人、趙の人。仙道を得て涿水にはいって消えてのち、赤い鯉に乗って祠堂に現われた。○**赤鱞公**…唐代、鯉はとらえたらすぐ放すべく定められ、赤鱞公とよばれた。唐の王室の姓の李と鯉は同音なので諱んだもの。○**手持白芙蕖**…李白の廬山謠に「手に芙蓉を把って玉京に朝す」芙蕖も芙蓉も蓮の花。○**清冷**…荘子の譲王篇に、舜がその友人無択に天下を譲ろうとしたので無択は清冷の淵に身を投じたという。

【通釈】高い絶壁に真っ赤な夕日が沈むと。深い谷間にそぞろ悲しみを誘う風が吹いてくる。天は岩石を裂き開いてこの青玉峡をつくり。そこに二頭の白龍とみえる滝を躍り出させている。滝の飛沫は霜か雪かと散じ、ものふりた淵の水面には澄みきった空が揺れている。淵から溢れた水は滑らかに音もなく。雙石谼へ向かって速やかにそそいでゆく。わたくしはここに来て立ち去り難く佇むうちに、絶壁に高々とかかる橋の東に、月があらわれた。広大な白銀の殿堂、静まりかえった水晶の宮居。できることなら琴高生に従って、赤鱞公なる鯉魚に乗り、水中へ去りたいものだ。それともいっそ、白い蓮の花を手にもって清冷の淵に身を跳らせようか。

蘇東坡 近藤光男　　蘇東坡一〇〇選　石川忠久　より抄出